YUKIO MISHIMA

三島由紀夫

現代日本文学アルバム——16

JAPANESE MODERN LITERATURE IN PHOTOS

現代日本文学アルバム 16

三島由紀夫

監修委員
川端康成
井上　靖

編集委員
足立巻一
奥野健男
尾崎秀樹
北　杜夫

学習研究社

現代日本文学アルバム
第16巻
三島由紀夫
昭和48年7月1日　初版発行

定価　2300円

発行人　古岡秀人
編集責任者　桜田　満
発行所　株式会社 学習研究社
東京都大田区上池台4丁目40番5号
郵便番号 145　振替 東京 142930
電話 東京 (03) 720—1111(大代表)
印刷・製本　図書印刷株式会社
製函　永井紙器印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙　特種製紙株式会社

✽この本に関するお問合せやミスなどがありましたら，
文書は，東京都大田区上池台4丁目40番5号（〒145）
学研「ユーザー・サービス本部事務局」
現代日本文学アルバム係へ
電話は，東京 (03) 720—1111　内線 352，353 か
東京 (03) 727—1600 へお願いします。

©1973 Printed in Japan
0395—284 718—1002

目次 YUKIO MISHIMA

目次

三島由紀夫文学へのいざない……5
三島由紀夫文学紀行／神島鎮魂歌……野坂　昭如　69
三島由紀夫文学旅行ガイド……涌田　佑　101
三島由紀夫の素顔……113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三島由紀夫とその時代……奥野　健男　181
三島由紀夫主要作品鑑賞小辞典……栗坪　良樹　213
年譜……山口　基　229
著作目録……山口　基　237
主要参考文献……越次　倶子　239

〔写真・資料提供〕

平岡家

荒木精之
伊沢甲子磨
川島　徹
川島　勝
斎藤康一
清水文雄
島尾敏雄
土門　拳
林　房雄
林富士馬
坊城俊民
山口　基

朝日新聞社
河出書房新社
共同通信社
講談社
サンケイ新聞社
新潮社
中日新聞東京本社
日本近代文学館
文藝春秋
毎日新聞社
読売新聞社

（五十音順敬称略）

〔撮影協力〕

奈良・大神神社
奈良・率川神社
奈良・円照寺
京都・金閣寺

〔編集スタッフ〕

編集責任
桜田　満

編集担当
東　　弘

校正
須山康邦

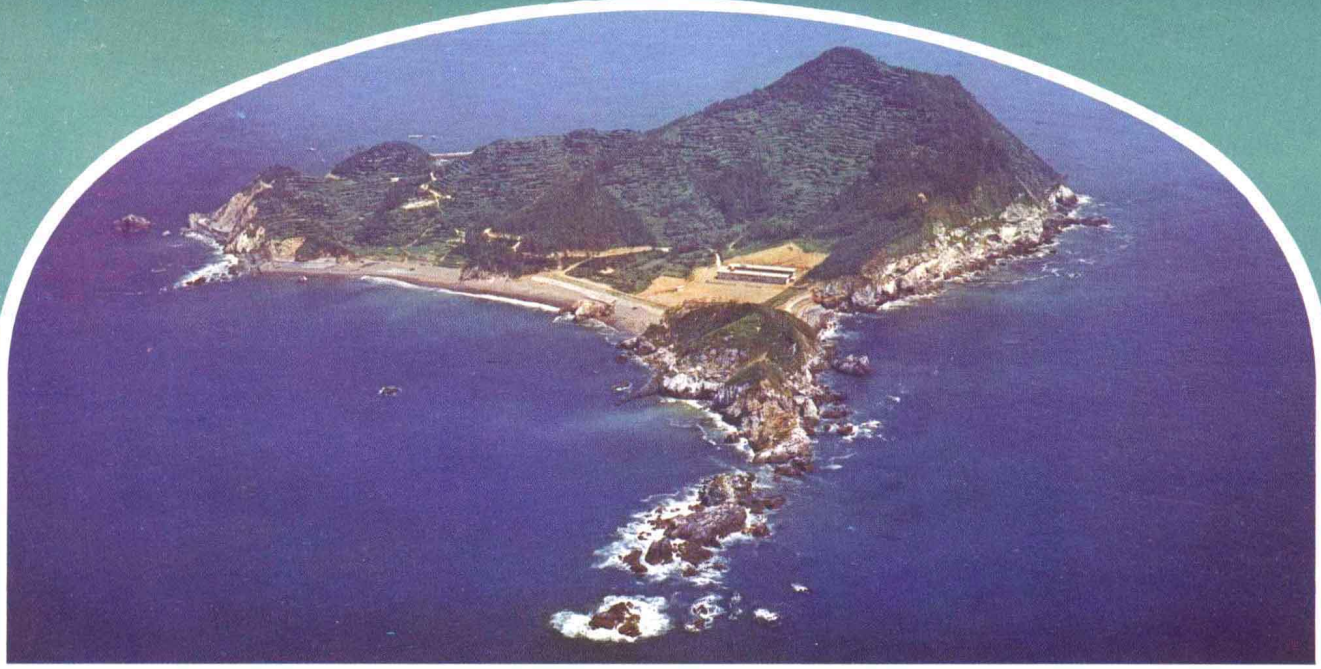
〔写真〕

成田牧雄
増山紀夫
国光義彦
村松孝輔
森　一義
岡沢克郎
岩倉徳光

地図製作
千秋社

装幀　大川泰央

レイアウト　大川泰央



三島由紀夫
文学へのいざない

上　空から見た神島　下　神島の港

歌島は人口千四百，
周囲一里に充たない小島である。（「潮騒」）

潮騒

歌島に眺めのもっとも美しい場所が二つある。一つは島の頂きちかく、北西にむかって建てられた八代神社である。

ここからは、島がその湾口に位いしている伊勢海の周辺が隈なく見える。北には知多半島が迫り、東から北へ渥美半島が延びている。西には宇治山田から津の四日市にいたる海岸線が隠見している。

二百段の石段を昇って、一双の石の唐獅子に戍られた鳥居のところで見返ると、こういう遠景にかこまれた古代さながらの伊勢の海が眺められた。

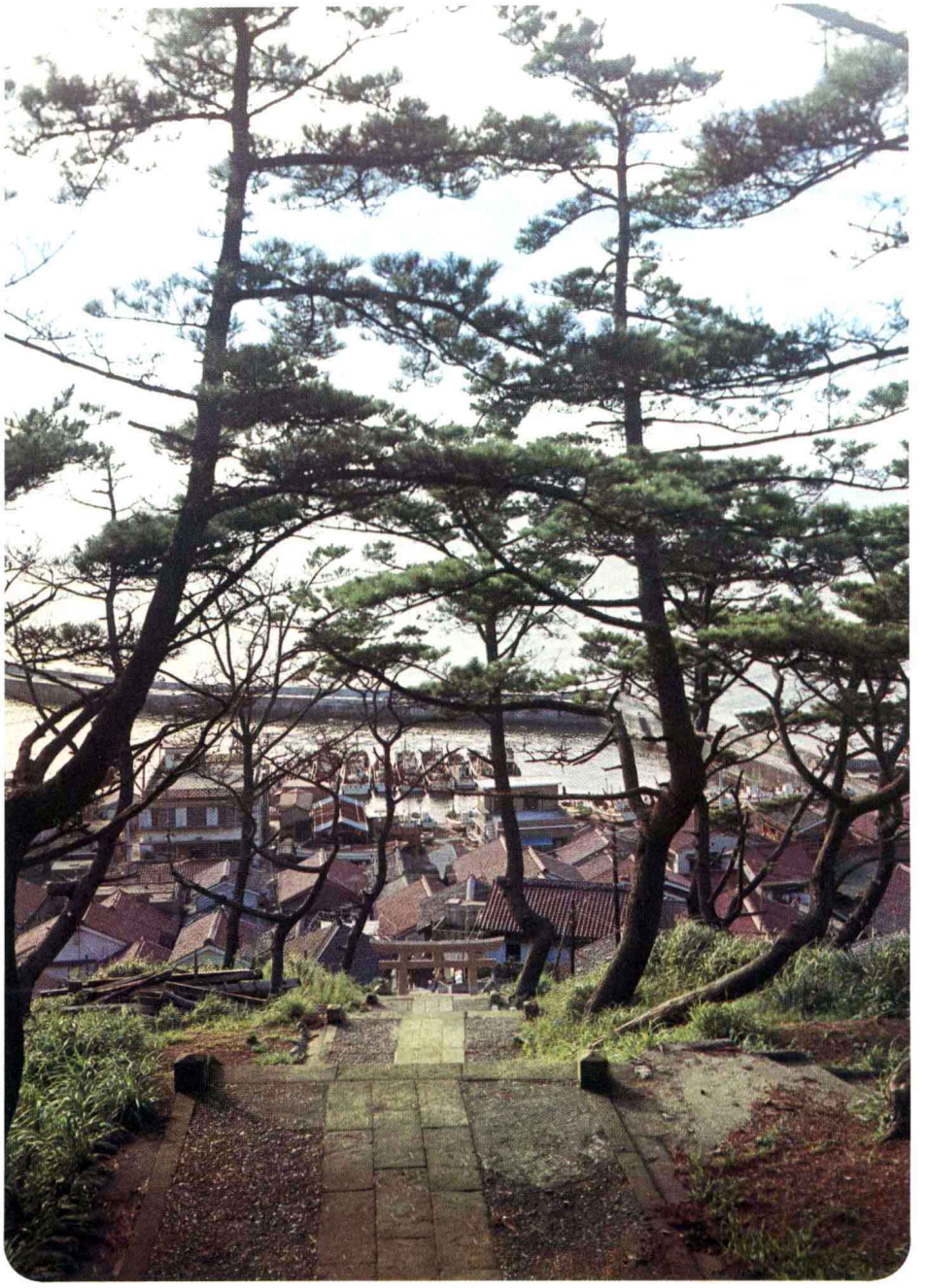
（「潮騒」）

神さびた〝石の唐獅子〟

◆ **解説**　昭和29年に書き下ろされた「潮騒」は，青春文学の代表として多くの若い読者を魅了し，過去三度も映画化され人気を呼ぶ。純朴で明るい健康的な男女を描いたこの作品は，古代ギリシャの世界を彷彿とさせる。

◆ **梗概**　周囲一里に充たない歌島（モデルは鳥羽市神島）に久保新治という十八歳になる漁師が，母と弟の三人で平凡だが楽しい生活を送っていた。彼は知的ではないが，逞しい海の男であった。ある春の夕ぐれ，漁から帰ってきた新治は，浜辺で見知らぬ少女に出会った。目もとが涼しい，眉の静かなその少女は西の空をじっと見つめていた。翌日，新治は漁に出たとき親方から，その少女は島の有力者である宮田照吉の末娘，初江であることを聞いた。その夜，村の青年会が**「寝屋」**であり，出席した新治だが途中でぬけ出し，**八代神社**に詣でた。彼はまず海の平穏，豊かな漁獲，村の繁栄，母や弟の無事を祈願した。そして，その後に「いつかわたくしのような者にも，気立てのよい，美しい花嫁が授かりますように！たとえば宮田照吉のところへかえって来た娘のような」と祈った。そして新治は「こんな身勝手なお祈りをして，神様は俺に罰をお下しになったりしないだろうか」と思うのであった。

綿津見命を祀ってある八代神社



八代神社石段から見た神島と伊勢の海

神島燈台より伊良湖崎を眺望

眺めのもっとも美しいもう一つの場所は、島の東山の頂きに近い燈台である。

燈台の立っている断崖の下には、伊良湖水道の海流の響きが絶えなかった。伊勢海と太平洋をつなぐこの狭窄な海門は、風のある日には、いくつもの渦を巻いた。水道を隔てて、渥美半島の端が迫っており、その石の多い荒涼とした波打際に、伊良湖崎の小さな無人の燈台が立っていた。

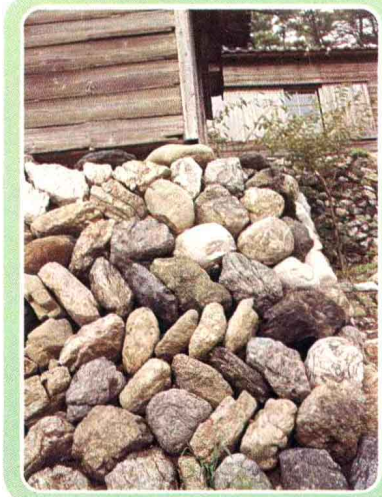
歌島燈台からは東南に太平洋の一部が望まれ、東北の渥美湾をへだてた山々のかなたには、西風の強い払暁など、富士を見ることがあった。

（「潮騒」）

神島燈台長が住んでいた官舎　新治はあやうく落第をするところを、燈台長の口ききで助けられ、それ以来、たびたびこの燈台まで魚を届けに来た

見ると道ぞいの小川のほとりで、六七人の簡単服の女たちが洗濯をしているのである。旧盆のあとはたまさかの荒布採りに出るくらいで、閑になった海女たちは、そうして溜った汚れものの洗濯に精を出し、……誰もほとんどシャボンを使わず、平たい石の上に布を伸べて両足で踏んでいた。

（「潮騒」）



その晩、新治は青年会の例会へ行った。むかし「寝屋」と呼ばれていた若い衆の合宿制度が、そういう名に呼びかえられて、今も多くの若い衆は自分の家に寝るよりも、浜辺のその殺風景な小屋に寝泊りすることを好んだ。

（「潮騒」）

▲「寝屋」とよばれる集会所

◀賑やかな笑い声が聞えてくる村の洗濯場

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山の中腹に見えるコンクリートの建物が観的哨跡。旧陸軍が伊良湖崎から射ち出す実弾射撃練習の観測を行なった所 ▶

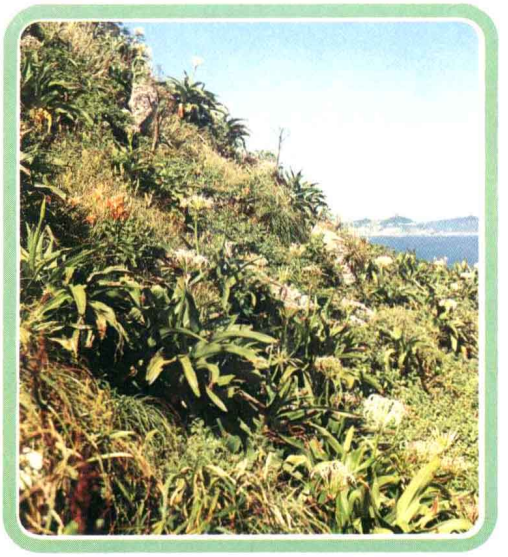
▲荒れ放題に放置されているこの観的哨の内部に，新治と初江が全裸で抱き合った部屋がある

やがて松林の砂地のかなたに、三階建の鉄筋コンクリートの観的哨が見えだした。この白い廃墟は、周囲の人気のない自然の静寂の中に妖しく見えた。伊良湖崎のむこう側の小中山試射場から、射ち出される試射砲の着弾点を、二階のバルコニイで双眼鏡を目にあてている兵が確認する。

（「潮騒」）

◆新治が初めて、初江と言葉を交わしたのは、元陸軍の**観的哨跡**に粗朶を集めに行ったときである。初江は道に迷ってそこに来たのだが、新治はこの思いがけない幸福にわが目を疑った。以後、二人の仲は急速に進み、給料日に新治が給料袋を落して浜辺で探していると、そこへ拾って家に届けてくれた初江が来て、そこで二人は唇を触れた。次の休漁の日に観的哨で再会を約した。ちょうど嵐になったその日、新治は一足先にやって来て、初江を待つ間眠ってしまった。目が醒めると、そこには焚火で下着を乾かす全裸の初江のあまりにも美しい姿があった。「目をあいちゃいかんぜ！」「汝も裸になれ」と初江は命じた。二人は抱き合ったが、「嫁入り前の娘がそんなことしたらいかんのや」という初江の道徳的な言葉に、新治はそれ以上は強いなかった。帰り道、寄りそって歩いている二人の姿を、新治に好意をよせていた燈台長の娘千代子に見られてしまう。

夕陽に映える古里ガ浜　対岸は渥美半島



弁天岬の東側の崖に群生する浜木綿

……古里の浜辺は磯づたい　弁天八丈ニワの浜……
その古里の浜は岬の西側に，島でも一番の美しい海岸線をえがいていた。（「潮騒」）

……海に面して左方の崖の上には，花ざかりの浜木綿が凋落期の寝乱れたような花ではなく，官能的な葱のような白さのしたたかな花弁を，紺碧の空へふりかざしていた。（「潮騒」）

歌島の海女は六月七月にもっとも働いた。根拠地は弁天岬の東側のニワの浜である。……ニワの浜は小さな入江を抱き、入江はまっすぐに太平洋に臨んでいる。沖には夏雲が聳え立っている。

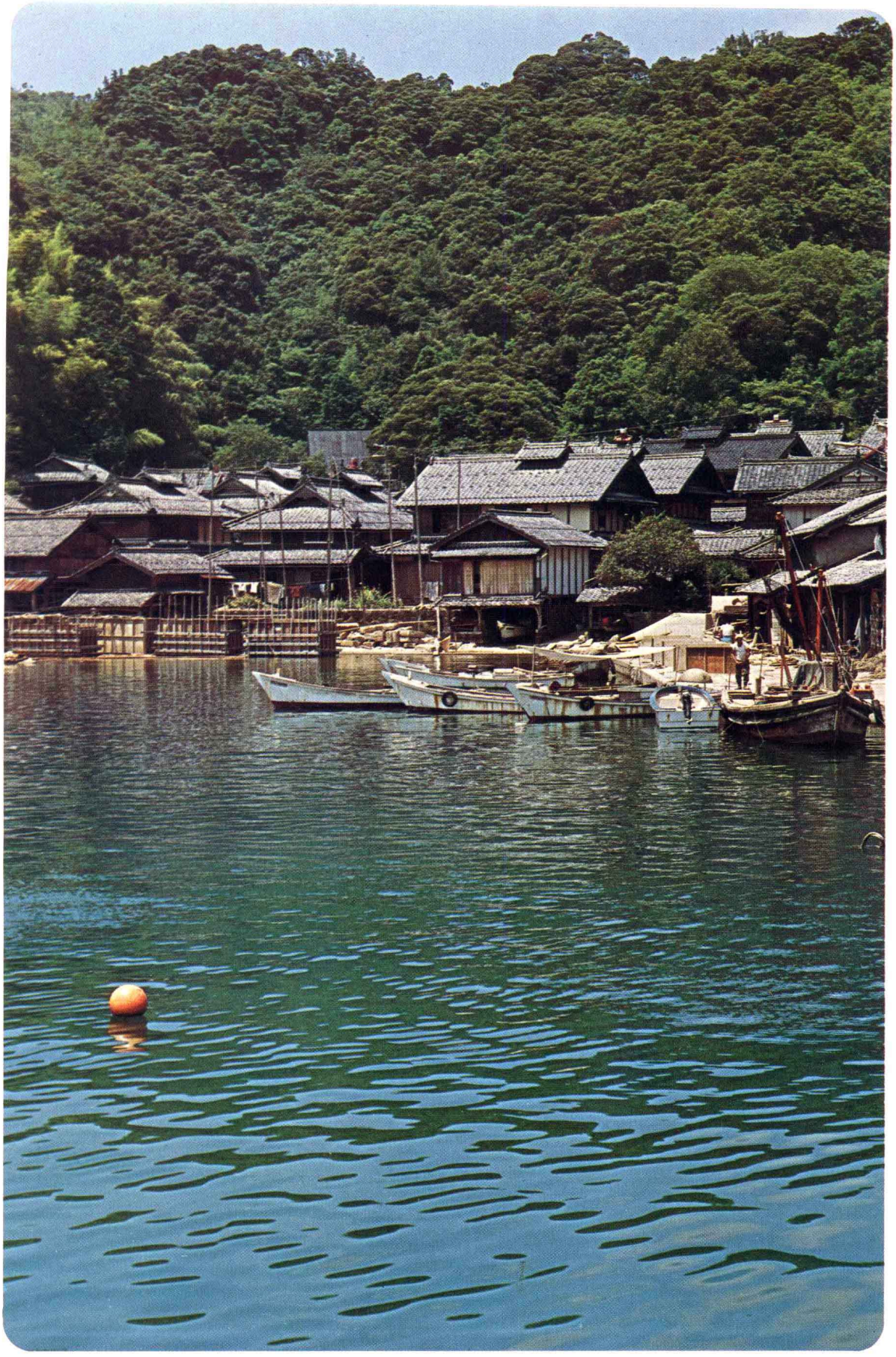
（「潮騒」）

◆新治と初江の噂は、島中に広まり照吉の誤解を生んだが、やがて、海女の季節になり、新治の母親は「健康的な処女の乳房」をしている初江を見て安堵の胸をおろし、賞品の懸った鮑とりで初江がもらった賞品を譲られ、島の女たちも誤解を解いていった。いっぽう新治は、ライバルの安夫と照吉の持船に乗り込むが、台風にあい危うく船が転覆するところを、浮標に命綱をつなぐ命がけの働きをして、船を救った。全てを知った照吉は「男は気力や。気力があればええのや」と初江の婿に決める。新治はあの冒険を切り抜けたのは、初江がくれた写真ではなく、自分の力であることを知っていた。

神島の海女（ニワの浜）

海女の根拠地ニワの浜　初江や新治の母親が競って鮑とりをしたのがこの入江である

金閣寺



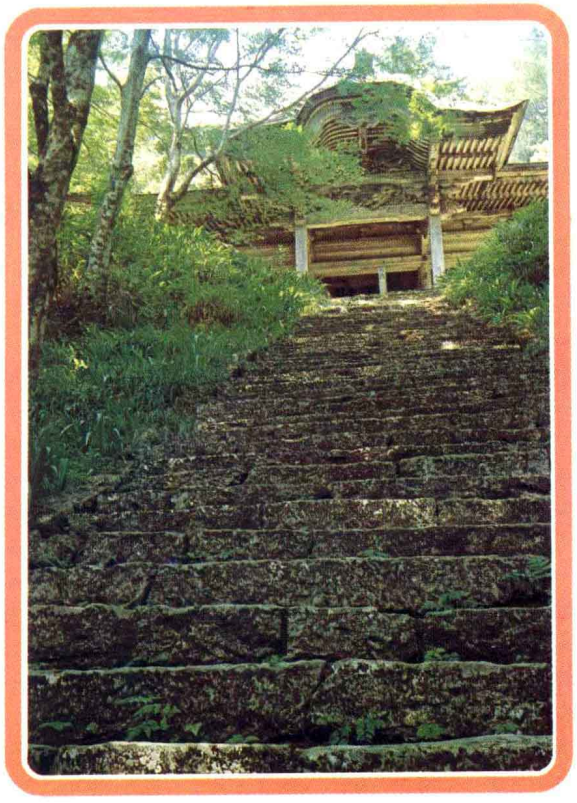
幼時から父は、私によく、金閣のことを語った。私の生れたのは、舞鶴から東北の、日本海へ突き出たうらさびしい岬である。父の故郷はそこではなく、舞鶴東郊の志楽である。懇望されて、僧籍に入り、辺鄙な岬の寺の住職になり、その地で妻をもらって、私という子を設けた。

（「金閣寺」）

主人公の「私」が生れた成生岬（京都府）の静かな漁村の佇まい

金剛院・空御堂（舞鶴市鹿原）

苔むした石灰石の石段と金剛院本殿



石段の上には金剛院の本殿があり、そこから左へ斜めに渡殿が架せられ、神楽殿のような空御堂に通じている。その空御堂は空中にせり出し、清水の舞台を模して、組み合わされた多くの柱と横木が、崖の下からそれを支えているのである。御堂も渡殿も、支える木組も、風雨に洗われて、清らかに白くて、白骨のようである。

（「金閣寺」）

◆**解説**　昭和二十五年七月二日、金閣寺焼失の放火事件があった。その事件に題材をとって書かれたのが「金閣寺」である。犯人の独白で展開されているこの作品は、曲折した吃りの内面と美意識を見事に観念化した戦後の記念碑ともいえる傑作である。

◆**梗概**　「私」は、生来の吃りで外界から隔てられていたが、内面は誰よりも豊かであった。「私」の中学時代に、村に海軍脱走兵が逃げ込む事件が起き、かねて「私」が思いを寄せていた有為子が、その脱走兵を**金剛院**にかくまい、やがて、彼女は憲兵の厳しい追及に屈し、金剛院の渡殿で脱走兵と共に自殺をする。「私」はその事件で、一挙にあらゆるものに直面した。人生に、官能に、裏切りに、憎しみと愛に、そしてその中にひそんでいる崇高な要素を、否定し、看過してゆくのであった。

京都　南禅寺山門の楼上から天授庵を見下ろす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com